

「村の古文書」と「宝永四年・

安政元年の大地震と大津波」

浜田 平 士

(会員 米水津宮野浦)

米水津には、昭和五十八年発足の「米水津の歴史を知る会」と平成十年発足の「米水津古文書会」の二つの会があり、郷土史の学習、歴史探訪、古文書の研究等に取り組んでいる。

この「村の古文書」と「宝永四年・安政元年の大地震と大津波」は、歴史を知る会として発表したものである。

米水津浦は、宝永四年（一七〇七）と安政元年（一八五四）の二度に大地震・大津波が襲来し、浦々は全滅の大被害を受けた。

この事は浦代浦に残る「成松文書」や各地区に残る伝承などで住民は多少は知っていた。

「米水津の歴史を知る会」では、初め「成松文書」を勉

強していたが、古文書の勉強を重ねる内に、大地震・大津波の事の重大さ、宝永四年は約三百年前、安政元年は約五十年の昔の事、今日既に百五十年の周期が来ている事などに気づいた。

また、色利浦には「塩月文書」、小浦には「小浦庄屋文書」が残されている事もわかった。

内容は「成松文書」と同じだが、「塩月文書」「小浦庄屋文書」も、宝永四年、安政元年の二度の大津波の状況が詳しく書かれている。また「間越の池」の事も記されており、地元の間越の人さえ初聞きのものもあり驚いた。

その頃は、中央の役所や学会でも東海地震についての研究が高まり対策も進んでいたようだが、南海地震やそれに伴う津波については少し新聞に載る位であった。

歴史を知る会では「話すばかりが能ではない、広く村民に分かって貰おう」と言うことになり、米水津村役場の防災担当に報告した。

平成十二年（二〇〇〇）には、村内小中学校の生徒向けに「村の大地震・大津波、宝永四年・嘉永七年の記録、天災は忘れた頃にやってくる」なる小冊子を編集、学校や全生徒に配布した。この冊子は色利浦出身で旧姓富松千津

美さん(現杉安千津美・日出町立藤原小学校校長)から書いて戴いた。ぜひ読んでいただきたい。



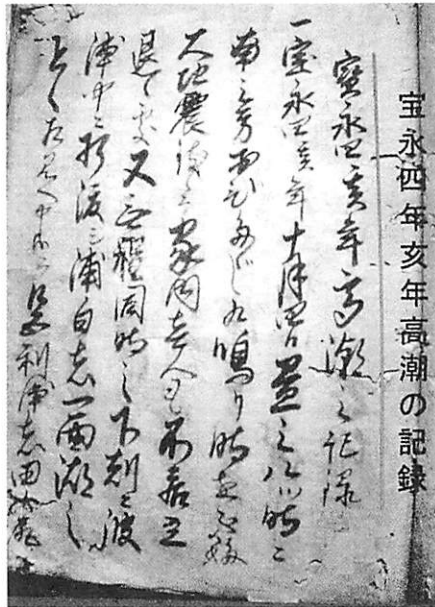
その後、佐伯史談古文書紹介「宝永四亥年高潮之記録」(二八二号)や広報誌「米水津」にも掲載した。

平成十六年二月に「村の大地震・大津波」として教育委員会から冊子を発刊している。

いくつかの古文書を紹介しよう。

一、浦代浦成松庄屋「宝永四亥年高潮の記録」

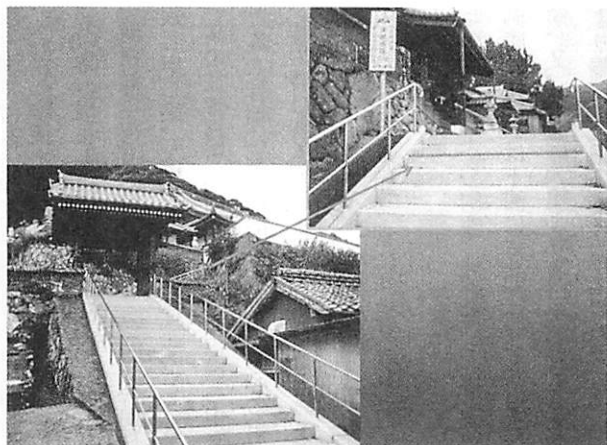
成松庄屋文書は、正式には「浦代浦当所代々役人万用控」とよばれる文書である。



一宝永四亥年十月四日(新曆十月二十八日)昼の八ツ時

(午後二時)に南の方おびただしく鳴り、時を移さず大地震致して、家内吾人も居らず立ち退き候ところ、又、程無く同時の下一刻(午後三時)に波浦中に打ち渡し、浦白は一面湖のごとく相見え申し候て、色利浦は田の尻より泥立ち、其の俣にこり、皆人出んと思ひ候ところに沖より網さわぎ帰るを見候ところ、波先にて少々相見え、汐差し込む事限りなく、浦々家財屋敷共に島迄も流れ申し候、

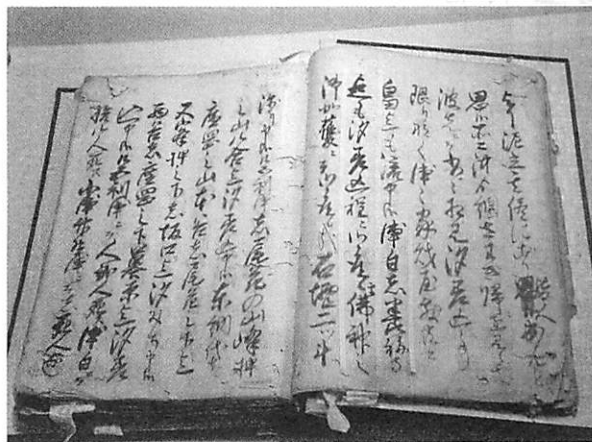
浦白は養福寺迄も汐差し込み程に御座候ところ、仏心の加護にて御座候や、石壇二ツ計り残り申し候、



養福寺山門 上より二段目まで津波が来る。

色利浦は尾花の山、峰押の山八合迄、汐差し込み申し候、東網代は広岡の山、本谷は尾花の下迄、又、峰押の下は坂口迄、汐みち申し候、西谷は広岡の下墓原迄、汐

差し込み申し候、色利浦にて人式人死す、浦白にて拾八人死す、小浦竹野浦にては死人なし、



宝永四亥年 高汐の記録

其の日北風少し吹き、克きなきにて、なる程暖かなる日寄り故、色利浦は関網に流れ寄り、其の夜ふけて、西嵐あそしになり候ところ、家拾軒計り沖へ流れ出し候、浦白、竹

野浦の家は皆大形、ほそ越間浦へ流さる、荒々は大灘に

も出り申し候、宮野浦は高汐に家浮き候はば、其の俣網をおきまわし候故、所々家財少しも流れ申さず候、あまつさえ外浦の道具迄流れ寄り候、其の日より翌年迄漁

事なく、皆々難義致し候えども、宮野浦は浦からよし、殊に其の時の損なき故、宝永五子年中迄も替りなし、色

利浦、浦白浦は汐も大分外浦よりみち、地畠迄流れ候故難儀致し申し候、左様なる時、宮野浦のしわざ皆人ほめ

けり、其の往昔百年以前もケ様なる汐満ち申し候事、年寄りたる人皆咄に承り候間、能く能く心の用心あるべ

く候、其の時は皆人死にあれば、家財なきゆえ少し物取りあげず、日数立ち候えば、皆諸事道具入用に候えども

不自由になり申し候間、常に諸道具取りあげ心の用心あるべき事なり、

一 其の時の高汐に土佐、阿波、熊野地、大坂迄高汐にて大破損御座候、佐伯は下浦にて蒲江浦、丸市尾大破に及び

申し候、又、中浦は大嶋より蒲戸迄少しも破損なし、代古浦より鶴谷、堅田、木立村迄新地大分つぶれ申し候

て、皆々難義致し候間、大地震致し候えは能く能く心を付け用心あるべく候間、且又、火難の節も常々の用心専

に御座候間、其の為書き記し申し候、

宝永五子年十一月廿三日書

以上

以上の宝永大津波を要約して見ますと、宝永四年十月

四日午後二時頃に、南の方で海鳴りがして大地震が発生した。震源地は南海道沖M8・4。続いて午後三時頃に津

波が打ち寄せ、波は浦中に満ち渡った。その時、浦白浦は一面湖のように見えた。「養福寺の石段二つばかり残す」

迄津波が上がった(海抜十一、五^尺)

色利浦は田の尻より泥が立ち上がって濁り、人々は皆外に出ようとしたところ、沖より騒ぎながら帰る網船は

波先に少し見える程であった。西谷広岡墓原の下(海抜十^尺)迄、津波が打ち寄せた。死者は色利浦二人、浦代浦十

八人他浦はなかった。

浦代浦・竹野浦の家は大方、ほそ越間浦へ流れた。又、家財などはあらあら沖合にまで流れ出た。

宮野浦は高潮で家が浮いたが、網をおきまわしたので家財は流れず、その上外の浦の道具まで流れ寄った。宮野浦のしわざは皆からほめられた。百年以上前にも

津波があったと伝え聞いていた。この度の津波では土佐・阿波・熊野地・大坂まで被災し、佐伯では蒲江浦・丸市尾浦が激しく、中浦の大嶋より蒲戸まで被害がなかった。代後浦から鶴谷・堅田・木立は新地は大分つづれた。

日本地震災害史によれば、この地震は宝永地震と呼んで、M8・4と推定され、被害は東海から南海道までに及び、津波は九州南東岸より伊豆方面まで打ち寄せ、倒壊家屋六万戸、死者二万人を出したと記録されている。

米水津湾は南東方向に向いているので、浦代浦は津波を真正面から受け、波の逃げ場がないので波が高くなった。色利浦は地区中央に本谷川が流れ、潮の侵入が容易であり奥地まで津波が上がった。宮野浦・小浦・竹野浦は正面から少し避けている地形からか波高が低かった。

同様の理由で蒲江浦・丸市尾浦は被害甚大であり、大嶋から蒲戸にかけては被害が少なかった。代後浦・鶴谷・堅田・木立の新地等がつぶされたのも地理的条件の影響であろう。

尚、宮野浦旧記によると、天満宮を浦の正中に造営していたがこの津波により損壊流失した。背後の山を伐り開

き社地を造り社を再建した。現社殿の位置である。

又、地区の伝承によれば、貞享年間（一六八八）に開山していた迎接庵は、この時の津波で庵の下から三段目（海拔五、七メートル）迄汐が上がった。



迎接庵（こうしょうあん）の階段
階段の下から三段目に「宝永四年拾月四日（西暦 1707 年）の津波で海水が此壇上まで上がったと伝えられていると書かれている。

（米水津村史）

仏像が安全だったばかりでなく、住民もここに避難していたであろうから被害が少なかったのだろう。

小浦では墓場の木の枝に藻が懸かっていた（高さ六メートル）との伝承が残っている。

佐伯藩の津波の様子は、温故知新録卷三、高慶公御手日記に書かれている。(三二二～三三六P参照)

二、「塩月文書」に見る宝永四年の大津波

この宝永四年の大津波の様子は、塩月文書にも同様の内容が記載され残されている。

この塩月文書は、藩政最後の米水津浦の大庄屋で、米水津村初代村長である御手洗想太郎氏が「旧記の写し」として残したものである。

その一部を紹介する。

旧記の写

(前略) 当浦の者あるいは色利、中村、すか崎の者は皆尾鼻の山に逃げはしりのほり、又、庄屋与七郎殿は子供衆引きつれ、むねおしの八合目を登りたまふ、東風網代の者は広岡の山の上にあがり候、汐みちさきは本谷は尾鼻の下迄さしこみ、又むねおしの下は坂口山の下迄汐みち、西谷は広岡の墓地迄汐さしこみ申し候、当浦にて人二人死す。一人は平五郎下人太郎治と申す年五十才計りなるもの、又一人は与兵衛の下人庄吉と申す者、宮野浦吉右衛門方にて死す年廿才計りなるもの、浦代にては十八人死す、小

浦、竹野浦には人じにはなし(中略)

地下の家ハ閩網にながれより、其夜ふけて西嵐になり、家拾軒計り沖に流れで候、浦代・竹ノ浦・小浦の家ハ皆大かた、細越間浦へながれあがる、あらあらは大なんにも出る、又、宮の浦ハ家浮き候と云、其俣、網おきまわし候故、所々家財少しも流れず……(中略) 人難義致し候間大地震致し候はばよくよく心付け用心これあるべく、其のため書き記し申し候、以上、

色利浦住人持主次郎兵衛

宝永五年十一月廿二日書

とある。

このように、内容は同じであるが、当時の庄屋与七郎の行動や人名等がより詳しく書かれている。

三、安政元年寅年の大地震・大津波

この文書は色利浦文書である。

〔安政元年寅年十一月五日地震海嘯ノ筆記〕

十一月五日大震海嘯ノ概略ヲ筆記セシニ、當年ハ例年ヨリモ暖気ニシテ兎角日和ヨク風多ク、小前のもものハ大概単物一枚ニテ稼業をなす程なりし、又、本日ハ別段ナギ

にて浪なく、実に暖か過ルと云ふ程なりしが、同日午後五時とも思しき頃、南ノ大洋あたりて大砲ノ如き音ありし故、時ならぬ雷鳴ニモヤト思ふ間もなく、南ノ方より地震致し漸次北に及ぼし、すわやといふ間も人家ヲ飛出申候、十歩式十歩モ行んとするに歩行事を得ず、其俣ニ立すくみにてありしが、本日ノ地震ハ横にふる地震にて次第につよく、其長き事ハ凡ソ三、四十分ノ間もありし様に覺へしが、小生等が立し所ハ数十年前よりの溝ありしが、其硫黄くさき事、鼻ヲつきぬく如くありしが、別に地ノ破裂ハあらざりし、地震過テ后ハ故人の口碑もありし故、井戸水等を見しに惣して泥水となりしも、矢張充滿シタリシに深更にして水脈ある所ハ、海岸附□ハ泥水ノ出る事おびただしく、大凡村中ノ水ハ不残出候様に見へたり、此時井戸ノ水ハ更ニナキ様ニナリ候、又、山谷も同様泥水數十間川下迄出候よし、海嘯の來ルハ四、五十分も后にして、此時海一面浪ノよする模様もなく、極オタヤカ(に)シテつなみの兆候更ニナキ様見へたれ共、老人の説にハ大地震あれバ必つなみあるゆへ氣ヲつけよとの事故、村中ノものハ海岸に眼ヲはなさず、ながめ居しに、追々海水膨張する事まのあたりなれば、村中へ通知し雨戸等をしめ、村中

一同逃出し頃ハ、高サ五六尺以上ナル石垣ヲのりこし、見る間に村中に充滿シ、凡ソ一番汐の満込しハ長キハ四、五町程、短キハ二、三十間ニ及びし、其頃ハ六時過キにして既に人員のほのかに見へし頃なりしが、其引汐ノ際ハ天地も崩るる如き音ありし故、濱手の家屋人畜すべテ流失必定セしと覺悟セしに、人畜家屋一軒も流失せず、夫よりさし引十二、三度ある度ごとに五間、十間と満込少くなりしよし、又、海岸六尋七尋もありし網船の定繫ありし所も引汐の度ニ網船の必ず海底につきしよし、目げきしたるもの話しなりし、麦畑ハ三度の汐にて白畑となりしモ、其ノ后すきかへし麦ヲ蒔しに相應の收穫ありしが、其俣式、三年ハ雜草生ゼザル事アリシ、本日汐ノ止みしハ午后ノ八時頃なりしが、微震ハ徹夜ニ、三十度に及び候、翌六日ハ微震度々ナレ共、未だ人家にハ入らず野宿なしたり、同夜ヨリ雨ふり出し北風となり、或ハ西となり、是迄と反對に夕に寒氣模様となり、翌々七日ハ朝小雨ふりしが、震動も少く最早人家にかへる準備中、同日午前八、九時頃、ドント響くや五日に十倍したる如き劇震にて、本日も横に打ふりし如く、濱並木松の枝も地ヲ打しが、小生等も地震と松枝に既に打倒されんとせども、直にやみし故つ

なみの恐ともなく、夫ヨリ日和も順席となり、震動も余程少くなりし故に、津浪の来ルハ□長き大震ナラでハ恐れなき様愚考セリ、津浪の前兆ハ、四五日前ヨリ天気暖和ニシテ浪等もなく、又、海岸にハ風雨の前にハ必ず南風雲出て、浪の来ル事あれ共、一天雲ナキト云、好天気ナルニ、時ナラヌ汐ノさし引なす事、一日定期満干ノ外幾度といふ事なく、五間満テハ五間引事のありし故、老人ノ説にハ、先年津浪のありし節、海^あびきありしよしなれハ、こんな暖カナル年ハゆだんがならぬから、用心するがよいとの事故、余程濱手のものハ注意セしに、四日に至りテハ一層汐のさし引はげしかりしに、五日にして大地震ありし、尚先月も南の方なりし様書しが、矢張此度も同し事ナルハ、全く前兆ありし口碑に伝へしものならん、従来濱手ノ新田畑ハ地震前ハ異常なかりしも、大震より余程低下セシモノナラン、安外に汐満込、大汐・小汐の別なく既に濱畑ハ海面となりし事、枚挙にいとまあらず、凡ソ平常ヨリ二尺内外ハ高さよふに見えたり、夫ヨリ漸次ハ、九年ヲ經過して、ようやく元に復し、現今は余程大浪ならでハ別状ナき様に見えたり(後略)

安政元寅年十一月五日地震海嘯ノ筆記

昔より地震は頻りにありしに、此の如き大震は、
 未だ経験せざる事なり。此の如き大震は、
 津浪の来りしに、先づ天気が暖和なり。且、
 海岸に風雨の来りしに、必ず南風雲出て、
 浪の来りし事あり共、一天雲ナキト云。好
 天気ナルニ、時ナラヌ汐ノさし引なす事、
 一日定期満干ノ外幾度といふ事なく、五
 間満テハ五間引事のありし故、老人ノ説
 にハ、先年津浪のありし節、海^あびきありし
 よしなれハ、こんな暖カナル年ハゆだん
 がならぬから、用心するがよいとの事故、
 余程濱手のものハ注意セしに、四日に至
 りテハ一層汐のさし引はげしかりしに、
 五日にして大地震ありし、尚先月も南の
 方なりし様書しが、矢張此度も同し事ナル
 ハ、全く前兆ありし口碑に伝へしものな
 らん、従来濱手ノ新田畑ハ地震前ハ異常
 なかりしも、大震より余程低下セシモノ
 ナラン、安外に汐満込、大汐・小汐の別
 なく既に濱畑ハ海面となりし事、枚挙に
 いとまあらず、凡ソ平常ヨリ二尺内外ハ
 高さよふに見えたり、夫ヨリ漸次ハ、九
 年ヲ經過して、ようやく元に復し、現今
 は余程大浪ならでハ別状ナき様に見え
 たり(後略)

安政元寅年十一月五日地震海嘯の筆記の一部
(塩月文書・色利浦)

このように塩月文書には、安政の大地震の事が詳しく記録され、各所に昔からの言い伝えや老人の説が引用され、後世の指針として役立つ事がわかった。

この地震についてまとめると次のようになる。

安政元甲寅年十一月

一、四日辰下刻（午前九時）地震、潮満干数度あり。

一、五日申下刻（午後五時）大地震、高潮度数不詳

色利浦は平生満潮より九尺、沓番潮元屋敷水神前、

東風網代太七方前迄、大庄屋所床下迄、畳濡れ申さ

ず、荷物後の山へ持ち運び、大庄屋皆合召仕の者、男

女四五人相残り、山へ小屋掛け致し居り候、家内子供

は西谷孫左衛門方へ逃げ行き候、

一、村方残らず最寄りの山端に逃げ去り、小屋掛け致し

候、但し、東風網代は広岡、中江は尾花、並びに葉

師庵の上、

一、浦廻り衆式人、土屋石右衛門殿、江藤源助殿居

り合われ候、

一、泊り番、本谷式人、西谷式人

一、人手別状無し、

一、六日、晴天和風、

一、浦代、竹野浦、小浦、見分に罷り越し候、右三ヶ浦

も同様地震高汐これあり候、

一、浦代、溺死女老人、村中は養福寺へ逃げこれあり候、

竹野浦、小浦も山端へ小屋掛け致し候、

一、浦廻り衆、今日より急に引取る、

一、泊り番、本谷式人、西谷式人

一、家内、西谷へ滞る、

一、七日、今晚より雨、曇天、

一、巳の上刻（午前九時）、大地震、今日のゆりにて

所々石垣崩れ候、御城山表、大崩れ候由、承知致

し候、

一、八日、大内浦より村中参り、後の山、相開き候、

新に小屋掛け致し候、相請け候もの前条の通り、

一、泊り番、大内浦六人、

一、八日、晴天北風

一、地震度々これあり、

一、間越へ御出張の御山奉行中崎元左衛門様下役一同

色利浦前へ藝州大崎船参り候に付き、右船へ間越

より逃げ移り候

一、泊り番、大内浦三人、

一、九日、曇或は晴、風烈しい、

一、地震昼夜共度々これあり、

一、十日、晴天

一、今夜四ツ時(午後十時)頃、地震、先日の地震に

三番目位と申す事に候、其の外度々これあり、

一、十一日、晴天

一、右大変断として当浦庄屋弥兵衛、御城下へ罷り出

候、人足喜兵衛、政右衛門、

一、少し宛、地震これあり、

一、泊り番、西谷式人、

一、十二日、同、

一、地震、少しつつこれあり、

一、泊り番、西谷式人、

一、十三日、同、

一、震動あり、

一、十四日、同、

一、震動地震これあり、

一、家内、本宅へ屋移り、

一、十五日、晴天、

一、右大変御立願に付、村中、氏神立岩宮へ惣籠、

一、村中大庄屋所へ見舞に罷り出候

一、十六日、雨天、虹

一、十七日、晴天、烈風、

一、十八日、晴天

一、組内より流出物過分これありに付、組内役人寄り

合い、浦代より流失の品多く、宮野浦拾い取り候

由、宮野浦相渡し申さず、右に付、拾い取り候もの

隠し置き候義、何共不埒の次第に付、有躰に差出し

候様、其の義無く候はば、役人並び持主立会い、屋

さがし致すべく候様、一統へ申し渡し候、

一、十九日、曇天、

一、廿日、晴天、

一、組内役人立会い、流失物吟味、

一、廿一日、同、

一、大庄屋不快に付、組内小庄屋、右大変、為御機嫌

伺い一同出町候

宝永四年と安政元年の二つの地震・津浪について紹介

した。